

1657年の仙台祭

— 2,810人が御城下を練り歩いた壮麗なパレード —

「松雲公採集遺編類纂」の巻185『仙台雜記』

「明暦三年九月十七日御祭礼之次第」を読み解く



一作お屋形船車。仕を片各引百人衣裳ゆき
の上子くろしき人つ目ぬいそく左地老からの
若牌子拾人衣裳各以舟船寺元内

一番 南村中町
川原町

明暦三年九月十七日御祭礼之次第

表紙画像は「和田義盛 巴御前 勇戦之体」

(立命館大学アート・リサーチセンター所蔵：資料番号 arcSP02-0384)

本編目次

はじめに	4
「明暦三年九月十七日御祭礼之次第」について	
一番 南材木町・川原町「屋台船」	5
二番 鍛冶町「碁盤忠信」	6
三番 荒町「扇の的」	7
四番 本材木町「橋弁慶」	8
五番 二日町「鐘巻寺」	9
六番 北材木町「猩々」	9
七番 肴町「朝比奈と五郎力くらべ」	10
八番 国分町「布袋」	11
九番 立町「山路」	12
十番 南町「孟宗」「夕顔」	13
十一番 大町一、二丁目「朝鮮通信使」	14
十二番 大町三、四丁目 個人商店参加	15
大町三、四丁目「巴御前」	18
補記	20
おわりに	21

はじめに

徳川幕府の礎を築き、死して後、東照大権現という神として祀られた徳川家康。伊達 62 万石の城下町仙台を開いた伊達政宗。稀代の英傑が世を去り、天下泰平の世が続く頃、町衆の心意気と大藩の威信をかけて行われる大祭は、人々の最大の娯楽となりました。

江戸にあっては天下祭と呼ばれた山王祭や神田祭、地方においては東照大権現を祀った**東照宮**が全国に造営され、家康の命日である 4 月 17 日には**例祭**が各地で盛大に行われました。徳川御三家の尾張（名古屋）、水戸、紀州（和歌山、和歌祭として継続中）それぞれ盛大に行われましたが、仙台東照宮の例祭（仙台藩では農閑期である旧暦 9 月 17 日に開催）は**仙台祭**と呼ばれ、そのスケールの大きさと山鉾の豪華さで全国に知られました。

本書では、治世 80 年に及んだ**加賀藩**の名君、**四代藩主前田綱紀（松雲公）**（在位 1645～1724 年）が生涯にわたって収集した膨大な史料の中の一つ、「松雲公採集遺編類纂」の巻 185『**仙台雜記**』に書き記された明暦 3 年（1657 年）第 2 回仙台祭の様子を紹介します。

「明暦三年九月十七日御祭礼之次第」について

この古文書は、金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の**加越能文庫（石川県指定文化財、全 34,405 点）**の一つで、全部で二十葉（枚）から成ります（因みに「仙台雜記」全体では 203 枚あります）。表題は『**明暦三年九月十七日御祭礼之次第**』で、祭の由来や全体の紹介等は記述されず、すぐに“一番 南材木町 川原町 一 作物・・・”と、作り物の紹介が始まります。「東照宮例祭」や「仙台祭」などの記述はありませんが、9 月 17 日の祭礼とあることから東照宮例祭・仙台祭についての記述であることは明らかです。作り物の名称、巡行参加者の役割や衣装及び人数などが紹介され、当時の山鉾巡行の様子を具体的に知ることができるとともに、祭りの見所が当初から様々な趣向が凝らされた山鉾だったことが分かります。

奥書から同時代に実見した記録（『仙台雜記』として編纂されたのは 1667 年）であることが確認でき、加賀藩主の命により収集・記録したという資料価値の高さ、**草創期の仙台祭の詳細な記述**であると同時に、**全国的に見ても山鉾巡行の詳細な記録としては最古級**であり、その価値は極めて高いといえるでしょう。

この時、山鉾を出した町は以下のとおりで、米沢時代から伊達家とともにあり、岩出山から仙台に移った御譜代町（大町、肴町、南町、立町、荒町で他に柳町が含まれる）と奥州街道沿いを中心とした商人町・職人町で、多くの町が専売の特権を持っていました。

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| ○一番 南材木町・川原町 | ○二番 鍛冶町 | ○三番 荒町 |
| ○四番 本材木町 | ○五番 二日町 | ○六番 北材木町 |
| ○七番 肴町 | ○八番 国分町 | ○九番 立町 |
| ○十番 南町 | ○十一番 大町壱・二丁目 | ○十二番 大町三・四丁目 |

明暦三年九月十七日御祭礼之次第

一番 南材木町・川原町「屋台船」

一番を飾った山鉾は南材木町と川原町（現在の河原町）が共同で出した「屋台船」です。京都の祇園祭には神功皇后じんぐうを祭神とする山鉾が船鉾うらてやま、占出山、大船鉾の3基あり、前祭の船鉾は出陣船鉾と称され、八坂神社に残る1441年の記録に「しんくくわうくうの舟」とあります。岐阜県美濃市の美濃祭り舟山車（黒船車として1674年に建造）も神功皇后と竹内宿禰しつらが乗っています。また、18世紀後半以降、仙台祭の際に土産物として販売された墨摺りの大判浮世絵、**仙台祭大絵図**にも神功皇后が度々描かれていることや先陣を切る山鉾であることなどから、この屋台船も祇園祭に倣った出陣船鉾で、神功皇后と竹内宿禰しつらの人形が設えられていたのではないかと考えています。

作り物の記録が残る明暦元年（1655）第1回仙台祭も一番は南材木町と川原町の「黒船」で、元禄12年（1699）の第24回仙台祭にも同じく「黒船」を出しており、他の多くの山鉾同様、作り物のテーマは長期間継続していた可能性があります。綱引きが100人と最大で、他の山鉾が20～50人であることから、他を圧倒する巨大な船形の山鉾が威風堂々と先陣を切っていたことがわかります。

ただし、綱引き100人という人数については、明治期に活躍した経済人で電狸王でんたぬおうと呼ばれた伊藤清次郎が、明治4年以降実見した記憶として「屋台の大きさは64人持ちが最大で控えが30人いる」と語っていること、祇園祭の船鉾の曳子が40人であることなどから、全員が一斉に曳いていたのではなく、交代要員を含めての人数と考えられます。

【現代語訳】

一番 南材木町 川原町

一、作り物は「屋形船」で車に仕掛ける。綱引きは百人。衣裳は浴衣の上に黒木綿のつきぬき^{※1}で、箔を縫い付けた鉢巻をつける。船の漕ぎ手である水主かこせがれの倅^{※2}は二十人。衣裳は綱引きと同じで、舟歌を歌う。柴垣打ち^{※3}がこの内三人。役者^{※4}が二十人。武具着^{※5}が二十人、袴^{※6}姿かみしもの警固が十七人、あわせて百五十七人^{※7}。

※1. つんぬき、袖なし半纏（以下、つんぬきと表記する）

※2. 若者（以下、若者と表記する）

※3. 柴垣節は当時流行した歌舞で体をくねらせ、手や胸を打ちながら踊る踊り

※4. ここでは役目に当たる人、役割を持った人

※5. 甲冑武者（以下、甲冑武者と表記する）

※6. 武士の正装かたぎぬで肩衣という袖の無い上衣と袴の組合せ

※7. 各人数と合計人数が一致しないが、そのまま表記する。以下、同様

【読み下し】

一番 南材木町 川原町

一 作り物、屋形船。車に仕懸け。つな引き百人。衣裳、ゆかたの上にくろもめんつき（ぬき脱^カ）、ぬいはくはち巻。かこの者、^{せがれ}倅 式拾人。衣裳、^{おのおの}各 同前、船歌にて。内三人、柴かき打ち。役者式拾人。武具着、式拾人。けいこ、拾七人、上下にて。合わせて百五拾七人。

二番 鍛冶町「碁盤忠信」

二番山鉾は鍛冶町（現在の南鍛冶町）の出した「碁盤忠信」です。盛岡秋まつりに同じテーマの山車があり、その造形を窺い知ることができます。モデルとなった人物は、^{ひでひら}藤原秀衡の命により^{つくのぶ}兄継信と共に源義経の郎党として平家追討軍に加わった**佐藤忠信**。「碁盤忠信－堀川夜討ち－」は、頼朝の意を受けて六条堀川にあった源氏堀川館の義経に夜襲をかけた^{とさのぼうしゅうしゅん}土佐坊昌俊に対し、忠信が枕元にあった重い碁盤を片手に、討手を蹴散らしたという伝説を基にした作り物です。なお、第1回仙台祭の二番も南鍛冶町と穀町の「忠信」で、享保15年（1730）の第45回まで記録が残る5回全てが同じ作り物です。因みに、成人男性による「野郎歌舞伎」の成立が1652年頃、「碁盤忠信」の文献初出は古浄瑠璃が1676年、歌舞伎が1694年であることから、仙台祭の山鉾の方が浄瑠璃、歌舞伎よりも早い可能性があります。

この行列で特筆すべきは^{ほろがけ}母衣懸武者が38人もいることです。岩佐又兵衛が描いた「洛中洛外図屏風」に江戸時代初期（1615年頃）の祇園祭に参加する母衣武者3名の姿が描かれていますが、竹の骨組みを布で覆った弓矢除けの防具である巨大な母衣を背負った姿は非常に目立つもので、時代が変わり合戦での利用はなくなった後も、山鉾や神輿を守り、祭を彩る出し物の一つとして重宝されたことが分かります。因みに母衣武者は弓矢等の攻撃から主君を守る親衛隊という重要な役割で、織田信長の家臣^{さつさ}佐々成政は黒母衣衆、前田利家は赤母衣衆として従軍していました。

なお、一番、二番の山鉾を見るだけでも流行の最先端を積極的に受容していること、祇園祭との共通点がいくつも見られることなどから、藩祖政宗亡き後も仙台藩の文化の先進性が健在であったことを窺い知ることができます。

【現代語訳】

二番 鍛冶町

一. 作り物は「碁盤忠信」で車に仕懸ける。綱引きは三十人で、衣裳は黒木綿の縫つめ^{※1}。徒^{カチ}^{※2}の者十人は裏地が赤の紙衣^{カミコ}^{※3}のつんぬきを着て竹杖を持つ。母衣懸け姿でいずれも弓を持った武者が三十八人。長刀を持った甲冑武者が四十八人、休憩用の床几^{しやうぎ}^{※4}を持つ者が三十八人、袴姿の警固が十八人、合わせて百七十七人。

※1.小袖、留袖のこと（以下、小袖と表記する）

※2.大名行列では徒歩で随行する下級武士のこと

※3.腰の強い和紙を糊で張り合わせ、着物に仕立てたもの

※4.折りたたみ式腰掛

【読み下し】

二番 鍛冶町

一. 作り物、こはん忠信。車に仕懸け。つな引き三拾人、黒もめん縫つめ。かちのもの拾人、紙衣つきぬき、赤裏、竹杖にて。母衣懸け武者三拾八人、いつれも弓持ちて。武具着四拾八人。長刀之れこを持つ。せうき持ち三拾八人。けいこ拾八人、上下にて。合わせて百七拾七人。

三番 荒町「扇の的」

三番山鉾は御譜代町の一つ荒町が出した「扇の的」です。「平家物語」屈指の名場面として知られ、絵巻、合戦図屏風、浮世絵等を中心に数々の芸術作品に取り上げられてきました。元暦2年(1185)の屋島の合戦で、平家方の女官、玉虫(後に平家の追討から逃れるため鬼山と名を変えた)御前が扇の的を矢で射抜いて見よと源氏方を挑発したところ、弓の名手那須与一が揺れる船上の扇を見事射抜いたという逸話を題材にしたものです。盛岡秋まつりや新庄祭の山車に同じものが現在もあり、作り物は波立つ海上を舞台に、馬上の甲冑武者那須与一と、十二単をまとった船上の玉虫御前の人形を中心としたものと考えられます。「釘貫」「籠紋」は山鉾を出した商家の家紋でしょうか。裏襟の赤や朱笠など、赤い色が持つ「厄除け」の願いと揃いの衣装へのこだわりが感じられます。

なお、第1回仙台祭の三番も同じく荒町でしたが、このときの作り物は室町時代に書かれた能で渡辺綱の鬼退治を題材にした「羅生門」、第2回以降は享保18年(1733)第47回まで、記録が残る6回全てが「那須与一」ものとなっています。

【現代語訳】

三番 荒町

一. 「扇の的」の作り物を、他の山鉾と同様、車につける。縄引きの四十人は、銀の釘貫一つ紋がついた黒木綿を着て、朱笠をかぶる。徒士の者八十六人は、透けるような被り物の紅絹^{かち}※1、金の籠紋に赤の裏襟^{ちみ}※2をつけ、色々なつんぬきを羽織る。母衣懸^{ちみ}※3の若者が二十五人、床几持ちが二十五人、小旗の指し物を持つ人が一人、裃姿の警固が二十人、合わせて百九十六人。

※1.紅絹、絹織物の一種で、真赤に無地染めにした薄地の平絹のこと

※2.着物の襟の裏側にぬいつける布

※3.本来は騎馬武者が背負った防具兼指物の一種で、竹籠を布で覆ったもの

【読み下し】

三番 荒町

一. あふきの的、作り物。車、右同前。縄引き四十人、黒木綿、銀にて釘貫一つ紋、しゆ笠。歩の者八拾六人、すきはうしのもみ、金にて籠もん、赤うらゑり、色々つき貫。倅せがれ式拾五人、ほろ懸け。せうき持ち廿五人。こはた持ち壱人。けいこ式拾人、上下にて。合わせて百九拾六人。

四番 本材木町「橋弁慶」

四番山鉾は本材木町（現在の立町周辺）が出した「橋弁慶」です。「義経記」等にかかれた、比叡山延暦寺の僧兵・弁慶が京の五条大橋で牛若丸（源義経）と戦って破れ、主従の契りを結ぶという大変有名な伝説を題材にしたものです。祇園祭には現在も「橋弁慶山」がありますが、橋弁慶山保存会によれば、牛若丸と弁慶の人形には永禄6年（1563）大仏師康運作の銘があるとのことで、いかに古くから親しまれた題材であったかが分かります。仙台祭の山鉾も同様に、五条大橋の欄干に立つ美少年・牛若丸と、千人切りを目前に長刀を振りかざす僧兵姿の弁慶だったと考えられます。第2回以降、享保15年（1730）の第45回まで記録が残る4回全てが「橋弁慶」か「牛若」となっています。また、仙台祭大絵図にも「於鞍馬山牛若丸剣術修行之体」、「牛若丸鬼一方眼に謁賜う体」（国分町 加藤屋直助）、「牛若丸 矢矧の長者か許にて音曲之体」（2種類、南町 宮城屋吉右衛門）の4枚が現存、仙台祭の全期間を通じて大変人気のあるテーマであったことがわかります。

行列に参加している「愛宕参り」については、同年1月、江戸の大半を焼いた大火災、明暦の大火があったこと、愛宕神社は火防の神として広く知られていたこと、仙台の愛宕神社は仙台祭を始めた2代藩主伊達忠宗が1650年に現在の愛宕山に移転したこと等から、城下の火災予防を祈って仙台祭の隊列に加えたのではないのでしょうか。

同じく「汐汲み」は、百人一首撰歌「立ちわかれ稲葉の山の峯に生うる 松としきかば今かえりこむ」で知られる平安初期の歌人^{ゆきひら}在原行平が、謹慎中に須磨浦で出会った汐汲み海女、松風・村雨姉妹との身分違いの悲恋を基にした能の名曲「松風」等で知られており、人気の素材を行列に取り入れたと考えられます。なお、汐汲みは寛政3年（1791）と弘化3年（1846）頃の仙台祭小絵図（大絵図同様、祭の土産物として販売された墨摺りの浮世絵：宮城県図書館蔵）に北目町の押え（最後尾）の内囃子（お囃子屋台）上の飾り物として描かれており、汐汲み人形等でおなじみの、汐汲み桶が両端についた天秤棒を担いだ着物姿の海女がモチーフと考えられます。また、仙台祭大絵図に「中納言行平卿 須磨之浦にて塩汲を見給う躰」（年代不詳）が2種類あり、河原町（岩間屋）から山鉾として出されていたこともあります。因みに、現在、汐汲みを山車装飾にしている例に田辺祭（和歌山県）があります。

【現代語訳】

四番 本材木町

一 作り物は「橋弁慶」で他の山鉾同様、車につける。黒木綿のつんぬきに一つ紋の羽織、桧笠を身に着けた縄引きが五十人、赤い裏地がついた浅黄色の羽二重を羽織った徒士の者が四十五人、金地の釘貫一つ紋の着物に編み笠を被る母衣懸が四人、愛宕参り四人、塩汲み五人、小旗持ち一人、袴姿の警固が十人、合わせて百四十二人。

【読み下し】

四番 本材木町

一 作り物、橋弁慶、車、右同前。縄引き五拾人、衣装、くろ木綿つきぬき、羽織^{かち}ぎつ紋、ひの木笠。歩の者、四拾五人、あさき羽二重、うら赤うらつき、黄金にて釘貫^{かち}ぎつ紋に、あみかさかふり、ほろ懸け

四人。あたご参り四人。塩汲み五人。小はた持ち五人。役者拾人。けいこ拾人、上下にて。合わせて百四拾式人。

五番 二日町「鐘巻寺」

五番山鉾は二日町が出した「鐘巻寺」。鐘巻寺は和歌山県の古刹、**道成寺**のことで、寺に伝わる**安珍と清姫の伝説**を題材としています。僧安珍に思いを寄せ、欺かれた清姫が龍蛇となって道成寺まで追ひ、鐘の中に隠れた安珍を焼き殺すという内容です。能や歌舞伎で広く知られた題材ですが、「鐘巻」は16世紀に能として書かれたのが最初で、極めて早い時期の作例といえます。第2回以降、享保17年(1733)の第47回まで記録が残る6回全てが「鐘巻」か「道成寺」で、元禄10年(1697)以降「道成寺」となっています。八戸三社大祭、盛岡秋まつりや新庄祭、日田祇園祭などに「道成寺」「娘道成寺」があります。また、木遣り2人とあり、仙台祭の草創期から**木遣りが唄われていた**ことがわかります。

【現代語訳】

五番 二日町

一、作り物は「鐘巻寺」で他の山鉾同様、車につける。縄引きは三十人、柿色の木綿の小袖で金丸に黒字一つ紋^{※1}、黒々頭巾に黒股引き^{たて}。立者^{※2}が九十人、黒木綿の**一重**^{ひとえ}^{※2}に、金丸一つ紋が付いたつんぬきを着て、**梅花皮**^{かいらぎ}^{※3}柄の鞘、大小二本の木刀を差し、紫頭巾に黒脚絆をつける。木遣り唄を歌う人が二人、山伏の出で立ち^{※4}で法螺貝を吹く人が二人、小旗持ちが一人、裱姿の警固が四十人、合わせて百六十五人。

※1.背中の中心に一つの紋をつけること

※2.伊達者のことか

※3.裏地が付かない着物

※4.梅の花の形をした鮫皮の一種

※5.身支度、身なり、装い

【読み下し】

五番 二日町

一、作り物、かねまきてら、車、右同前。縄引き三拾人、かき木綿ぬいつめ、金丸壱つ紋、くろくろ頭巾、黒ももひき^{たて}。立者九拾人。くろもめんひとへつきぬき、金丸壱つ紋、大小かいらぎ、但し木刀、紫頭巾、黒きやはん。木遣り式人。貝吹き式人、山伏出立ち^{いで}にて。小はた持ち五人、けいこ四拾人、上下にて。合わせて百六拾五人

六番 北材木町「猩々」^{しょうじょう}

六番山鉾は北材木町(現在の春日町・国分町三丁目付近)が出した「猩々」。猩々は能の演目の一つで、赤髪に赤面、海中に住むという異形の者で、酒を好み変幻自在の舞を披露して福德をもたらすという縁起

の良い出し物です。作者、初演ともに不明。明暦元年、第1回仙台祭の四番で北材木町と東木町が、第2回以降は北材木町単独で、享保17年(1732)の第46回まで記録が残る5回全てが「猩々」です。名古屋東照宮祭で1658年に猩々車が出たことが記録に残る他、大垣祭り、赤坂氷川神社、大阪天神祭、盛岡山車秋まつりなどに作例があります。作り物は猩々がかめ甕からひしゃく柄杓で酒をすくう仕草や、1人ないし2人で舞う姿が考えられます。猩々に扮して踊る人が大人と若者合わせて104人、踊り唄の役者が16人と、非常に華やかな歌舞中心の山鉾であったことが分かります。

【現代語訳】

六番 北材木町

一. 作り物は「猩々」で、他の山鉾同様、車につける。縄引きは二十人、衣裳は水色の木綿で丸の中に大の紋がつく。赤頭巾が五十人、猩々の出で立ちで酒を飲むための大きな柄杓を担ぐ。同様のいで立ちで小さな柄杓を持つ若者が五十四人、何も小袖である。甲冑武者が二十六人、愛宕参り姿が五人、羽団扇はうちわ※¹担ぎが六人、踊り唄を歌う役者が十六人、作り物の馬に乗る下女が一人、翁が1人、煙草売りが一人、小旗持ちが一人、袴姿の警固が三十八人、合わせて二百三人。

※1.鷹の羽で作った団扇

【読み下し】

六番 北材木町

一. 作り物、猩々。車、右同前。縄引き二拾人、衣裳、水色木綿、丸の内に大文字。赤つきん五十人、猩々いで出立ちにて、銀の大柄杓いづれかつき。倅共五拾四人、同じ出立ちにて銀の小柄杓いで持ち、何れもぬいつめなり。武具着式拾六人。あたこ参り五人。羽うちいつはかつき六人。役者拾六人、おとり・うた、作り物馬にのせ。下女い壱人。翁い壱人。たはこ売りい壱人。小はた持ちい壱人。けいこ三拾八人、上下にて。合わせてい三百三人。

七番 肴町「朝比奈と五郎くらべ」

七番山鉾は御譜代町の一つ肴町(現在の大町2丁目、国分町1丁目付近)が出した「朝比奈と五郎くらべ」。曾我物語は曾我十郎・五郎兄弟が18年間の艱難辛苦の末に1193年、源頼朝が富士山裾野で催した巻狩(狩場を大勢で囲み、獣を追い詰めて射止める狩猟)の夜に父の仇、工藤祐経を討つという話で、兄は討死、弟は斬首という結末を迎えます。赤穂浪士の討入り、荒木又右衛門が助太刀した鍵屋の辻の決闘とともに「日本三大仇討」と呼ばれます。鎌倉時代には成立し、その後、様々な物語が派生し広まり、大変人気がありました。この山鉾もその一つで、仇討ちに血気に逸る曾我五郎の鎧の草摺を、頼朝の有力御家人の一人、和田義盛の三男で天下無双の豪傑として知られた朝比奈三郎義秀がつかんで引き留めたと伝わり、二人の力比べが「草摺引」と呼ばれ有名です。

高知県の町楯本神社に1646年奉納の絵馬があり、江戸時代の早い時期には広く知られた物語であったことが窺えます。仙台祭大絵図に「朝比奈三郎 初春幼遊之体」(年代不詳)があり、青森ねぶたや盛岡山車に作例があります。作り物は血気にはやる曾我五郎の鎧の草摺を朝比奈三郎がつかんで引き止める、二人の力比べの姿が考えられます。作り物にはとらわれず、鞆鼓踊りや愛宕参り、比丘尼、傘鉾な

どバラエティ豊かな行列の様子が伺えます。

なお、江戸時代、江戸歌舞伎の初春興行は曾我物と決まっておリ、曾我兄弟の仇討ちのあった旧暦5月28日を中心に曾我祭が行なわれていました。すずめ踊りもこの曾我祭で踊られて人気を博したもので、仙台で伝承されていたすずめ踊りにも影響を与えたと考えられます。

【現代語訳】

七番 肴町

一、作り物は「朝日奈と五郎力くらべ」で、他の山鉾同様、車につける。紫木綿のつんぬきを羽織った角頭巾の縄引きが三十人。白の小袖に黒の羽織、桧笠を被り、黒蛭巻^{※1} 大小の刀を差し、竹杖を持った歩の者が五十人。倅共十二人は金烏帽子を被り、采配^{※2}を腰に差し、太刀を佩き、衣裳は貫や垂れ等色々で胸につけた羯鼓太鼓を打ちながら踊る。愛宕参り姿の若者が三十四人。女性の出で立ちで、貫や垂れなど衣裳は色々で、作り花を持ち、桧笠を被る者が二十四人。役者^{※3}をつとめる比丘尼^{※4}。射手の者が三人、笠鉾が四本、小旗持ちが一人、袴姿の警固が二十六人、合わせて百七十九人。

※1.刀の柄や鞘などを金属の薄板で螺旋状に巻くこと

※2.棒の先に細かく裂いた紙を束ねて結び付け、指揮をとるのに用いる

※3.ここでは役目に当たる人

※4.尼僧

【読み下し】

七番 肴町

一、作り物、あさいなと五郎力くらへ。車、同前。縄引き三拾人、紫木綿つき貫、角頭巾。歩の者五十人、白小袖、黒はをり、ひの木笠、大小くろひなまき（蛭巻^カ）、竹杖。倅共拾貳人、かつこおどり、衣装色々ぬき・たれ、金盃ほし、再拝（采配^カ）をこしに指し、太刀をはき申し候。あたご参り、倅三拾四人。女出立ち、衣装色々ぬき・たれ、作り花持ち、ひの木笠にて貳拾四人。役者をつとめ、ひくに。いての者三人。笠ほこ四本、小はた持ち壱人。けいこ貳拾六人、上下にて。合わせて百七拾九人

八番 国分町「布袋」

八番山鉾は国分町（現在の国分町通り沿い）が出した「布袋」。布袋は10世紀頃中国に実在した僧侶で、日本では七福神の一神として信仰され、大きな袋を背負った福々しい太鼓腹の僧侶の姿で知られています。第1回以降、享保17年（1732）の第46回まで記録が残る6回全てが「布袋」となっています。

かつては祇園祭にも「布袋山」があり、高山祭の布袋台には有名なからくり人形、名古屋市有松天満社には1675年製作の布袋車が現存、大垣祭りの布袋軸が平成24年に復元され、八戸三社大祭にも山車人形が出ており、宮城県村田町では、現在も「布袋まつり」が行われているなど、縁起の良い山車の飾り物として全国的に人気があります。作り物は金の角を持つ牛の背に乗る布袋です。総勢245人が繰り出した唐人行列は沿道の見物客を大いに楽しませたことでしょう。なお、唐人という呼称は中国人に限らず広く外国人を示す呼び名として使われています。

【現代語訳】

八番 国分町

一、作物は「布袋」で他の山鉾同様、車につける。但し、金色の角を持つ牛の背の輿に載せて引く。唐子は十三人で唐人衣裳に香木の沈香じんこうを入れる桶になの荷もの物^{※1}を持つ。唐子七十人は黒の小袖で唐人笠^{※2}を被り、思い思いの作り物を持っている。大人の唐人は八十七人で同様の衣裳。口上をいう若者が二人、笠鉾持ちが三人、役者が七人、床几持ちが二十五人、裱姿の警固が二十五人、合わせて二百四十五人。

※1.肩に担ぐ持ち物

※2. 縁があり中央が高く上がった笠

【読み下し】

八番 国分町

一、作り物、ほてい。車、右同前、但し、こしにて引く。牛の角、金にて仕り候。唐子拾三人、唐人出立ち、ちんかう桶、になひもの。唐子七拾人、黒縫つめ、唐人笠、思ひ思ひの作物、持ち申しそろう候。おとな唐人八拾七人、同出立ち也。ことふれせがれ俵 式人。笠ほこ三人。役者七人。せうき持ち式拾五人。けいこ式拾五人、上下にて。合式百四拾五人。

九番 立町さんろ「山路」

九番山鉾は御譜代町の一つ、立町（現在の立町周辺）が出した「山路」。花人親王（のちの用明天皇）が、山路と名乗る草刈りに身をやつして長者の家に奉公、牛をも魅了したという美しい笛の音で、恋心を伝え長者の娘と結ばれたという伝説が「山路が笛」「草刈り山路」として知られており、この伝説をモチーフにしたものと考えられます。

石川豊信の浮世絵に「見立草刈山路」（18世紀）があり、作り物はこの浮世絵のように牛の背に乗り横笛を吹く草刈り姿の青年でしょうか。仙台祭の飾り物としては記録に残る唯一の事例です。山車の飾り物としては八戸三社大祭に「草刈山王」や「草刈山露」が過去にありました。山鉾の飾り物としては珍しく、かつ極めて早い時期の作例と考えられます。母衣武者が52人とこちらもすごい人数です。

【現代語訳】

九番 立町

一、「山路」の作り物を他の山鉾同様、車につける。縄引きは五十人、衣裳は浅黄木綿に柿色の着物で、二筋の縞模様がある。竹の子笠^{※1}を被る。草刈り姿の子どもは二十五人、蓑を着て桧笠を被り、鎌を腰に差す。母衣懸け武者が五十二人、五人は行器^{ほかい}^{※2}担ぎ。笠鉾が二本に小旗持ちが一人。床几持ちが五十人、裱姿の警固が十人。合わせて二百二十二人。

※1.竹の子の皮で作られる笠。その形からまんじゅう笠とも呼ばれる

※2.食物を携行する容器

【読み下し】

九番 立町

一、山路の作り物、車、右同前、縄引五拾人。衣裳、浅黄木綿にかきの忍もん、筋二筋、竹の子笠にて。

草かり子共弍拾五人、みのを着し、ひの木笠にて、かまをこしにさし。ほろかけ武者五拾弍人、五人はほつかい（行器^{ほかい}カ）かつき。笠ほこ弍本に、小はた持壱人。せうき持五十人、けいこ拾人、上下にて。合わせて弍百弍拾弍人

十番 南町「孟宗」・「夕顔」

十番山鉾は御譜代町の一つ南町（現在の一番町一・二丁目周辺）が出した「孟宗」と「夕顔」。

孟宗は3世紀に実在した呉の政治家で、母のために冬の竹林で筍を探し（孟宗）竹を掘り当てた故事で知られる「二十四孝」の一人です。第2回以降では元禄12年（1699）第24回に「孟宗」の記録が残ります。また、寛政3年（1791）と弘化3年（1846）頃の仙台祭小絵図、南町の押えの内囃子上の飾り物として2度描かれており、小絵図同様、雪の竹林で筍を探す蓑笠に鍬を担いだ孟宗の姿がモチーフと考えられます。現在も祇園祭に孟宗山があります。

「夕顔」は、仙台祭大絵図に「若紫」（第5帖）、「紅葉賀」（第7帖）、「花の宴」（第8帖）、「乙女（六条院造宮）」（第21帖）、「胡蝶」（第24帖）、「若菜」（第34、35帖）、「匂宮」（第42帖）、「早蕨」（第48帖）等、「源氏物語」を題材とした浮世絵が数多く残っていることから考えて、源氏物語第4帖「夕顔」の飾り物である可能性が高いように思います。作り物は夕顔が香を焚き込めた白い扇に和歌を書き、夕顔の花を載せて童女に持たせて光源氏の従者に渡すという、源氏と夕顔の出会いの場面でしょうか。全国的に見ると、源氏物語を題材にした現存する山車は以外に少なく、源氏物語を主題とする山鉾は仙台祭の特徴の一つだったといえるでしょう。

「夕顔」は10人担ぎとやや小ぶりですが、めずらしく舁き山で、曳き山と舁き山の2種類を出している唯一の例です。また、「花籠担ぎ」が20人とありますが、現在も籠にたくさん花飾りを付けた花籠まつりが、横浜市都筑区杉山神社の花籠の舞や豊橋市白山比咩神社の花籠行列、鳥取県智頭町垂井神社の花籠まつりなどに伝わっており、花籠の行列が初期の仙台祭でも行われていたことがわかる貴重な記述です。

【現代語訳】

十番 南町

一、作り物は「孟宗」で、他の山鉾同様、車につける。縄引きは四十人、衣装は黒木綿の縫いつめに角頭巾。歩の者は三十人で白の小袖に、緋綸子のつんぬきを羽織り、小編み笠を被る。竹杖を持つ者が三十人で、紫頭巾や竹子笠を被る。花籠担ぎは二十人で衣装も笠も色々。

一、夕顔の作り物は担ぐ人が十人。他に貝吹き^{※1}が二人、小旗指しが一人、甲冑武者が二人、はり馬^{※2}乗りが一人、小間物売り商人が三人、地黄煎^{ぎょうせん}^{※3}売りが二人、福茶売りが一人、袴を着た警固が二十人、合わせて百六十五人。

※1.山伏姿で法螺貝を吹く者

※2.張り子で馬の頭をつくって竹で継ぎ、竹の下端に車をつけて跨って遊ぶ玩具、春駒のことか

※水あめのこと

【読み下し】

十番 南町

一、作り物、もうそ。車、右同前。縄引き四拾人、衣装、黒木綿、縫いつめ角頭巾。

^{かち}歩の者三拾人、衣装、白小袖、緋綸子のつき貫、小あみ笠。

竹杖に三拾人、紫頭巾、竹の子笠。花籠かつき式拾人、衣装色々、笠色々。

一、夕顔の作り物、かつき人拾人。^{ふき}貝吹式人。こはた持ち壱人。

武具着式人。はり馬乗り壱人。こまもの売り商人三人。きやうせん売り式人。

ふくちゃうり壱人。けいこ式拾人、上下にて。合わせて百六拾五人。

十一番山鉾 大町一丁目、二丁目「朝鮮通信使」

十一番山鉾は御譜代町筆頭、大町一、二丁目（現在の町一・二丁目付近）が出した「朝鮮通信使」。朝鮮通信使は朝鮮から日本に派遣された外交使節団で、江戸時代、徳川家の將軍襲封祝賀を中心に 12 回来日しています。因みに「通信」には“^{よしみ}信を通わせる”という意味があります。一行は多い時で約 500 人、対馬から江戸まで各地で饗応を受けながらの旅で、鎖国下の日本において学問・文化の交流にも大きな役割を果たしました。異国情緒豊かに鳴り物や踊りとともに練り歩く通信使一行は強烈な印象を残したようで、現在でも通信使に由来する唐人踊りが三重県津市、鈴鹿市及び岡山県瀬戸内市に伝わります。

当時、直近の通信使は明暦元年（1655）、江戸時代 6 回目の使節団が徳川家綱の第 4 代將軍就任祝賀のために江戸・日光を訪れていますので、この時の様子を見聞して出し物に仕立てたものと考えられますが、いかにその行列が当時の人々の関心を集めたか、また、仙台藩の領民が流行に敏感だったかが窺えます。なお、本文書では「通信使」ではなく「お見廻り」という名称がつけられています。

車輪のついた山鉾を曳くのではなく、人が担ぐ出しもので、輿に乗った正使役（大将唐人）を中心に、唐人踊りがメインの異国風の賑やかな行列であったことが窺えます。仙台祭に朝鮮通信使が出たことがわかる唯一の記録ですが、通信使のコースから遠く離れた仙台で、通信使来日からわずか 2 年後に祭の出し物として取り上げられていたことには驚かされます。

【現代語訳】

十一番 大町 壱丁目 二丁目

一、作物は朝鮮国より日本へ御見廻（舞）^{こしか}※¹の体。大将唐人^{こしか}※²を輿にのせ、輿舁きは十人。唐人行列の出で立ちは大旗一本、吹流し一本、小旗一本、長刀二振、鉄砲二丁、弓二張、割り竹二本、太鼓一つ、進物の御朱印箱一つ、籠にはいった作り物が一つ、籠にはいった虎の作り物が一つ、巻物が三十本。

^{かんげん}管弦の役者が三十一人。踊り子が十六人。唐人の出で立ちで踊る役者が五十五人。唐人姿の徒士の者が二十五人。床几持ちが十四人。荷ない茶屋^{かち}※³が二人。台所物唐人^{かち}※⁴、作り物の馬に乗った唐人押さえ^{かち}※⁵が馬上に一人。作り物を持って歩く者が四十五人。七本道具、袴を着た警固が十八人、合わせて二百三十四人。

- ※1.「見廻り」も「見舞い」も誰かを訪問すること
- ※2.正使
- ※3.天秤棒に茶箱と茶釜をつけ茶をふるまう商い
- ※4.肉食であることを示す鳥等を持ち、賄い唐人とも呼ばれる
- ※5.最後を飾る出し物

【読み下し】

十一番 大町 壱丁目 二丁目

一. 作り物、朝鮮国より日本へ御見廻（舞）の体。大将唐人こしにのせ、こしかき拾人。唐人の出立ち。大はた壱本。吹なかし壱本。小はた壱本。長刀式振、鉄炮式丁、弓式張、わり竹式本、太鼓壱つ、此の外、進物御朱印箱一つ、九尺の作り物、籠に入れ壱つ。虎の作り物、籠に入れ壱つ、巻物三十本。くわけん（管弦^{かんげん}）の役者三拾壱人。おとり子拾六人、唐人出立ちにて。おとり候^い時の役者五十五人。唐人歩^{かち}の者式拾五人。せうき持ち拾四人。にない茶屋式人。台所持ち唐人、作り物、馬に乗り。唐人おさへ馬上壱人、作物^{かち}。歩の者四拾五人。七本道具、けいこ拾八人、上下にて。合わせて式百三拾四人

十二番 大町三、四丁目 個人商店参加 1 2

壮大なパレードの最後を飾るのは大町 3、4 丁目、これまでの参加方法とは異なり、個人商店としての参加と町全体での参加の両方あり、御譜代町筆頭、木綿・絹布・小間物の専売で財をなした大町の繁栄を窺うことができます。出し物名と参加人数、出品者名が一つ〇〇、一つ〇〇と簡潔に列挙されています。個人名は 12 名が記され、象、鯨^{なます}に瓢箪、蜘蛛のからくり人形、酒吞童子など、バラエティ豊かな様々な作り物が出されています。便宜上、小見出しをつけました。車に曳かせ、といった記述がみられることから小型の山車で、曳き手や警固等の人数は記述を省略しているものと考えられます。仙台祭が始まった頃は町単位だけでなく、大町の大店は商店毎に創意工夫し参加していたこと、からくり人形が仙台祭にも出ていたことなどが分かる貴重な記述です。

なお、記録が残る第 1 回及び第 23 回元禄 10 年（1697）以降は大町 3,4,5 丁目の 3 町合同で参加しており、3,4 丁目の 2 町合同参加は、記録上は第 2 回及び第 6 回の寛文 5 年（1665）のみです。

1 2 - 1. はり馬

春駒は一般的には馬の頭部に棒を付けた子どもの玩具ですが、18 世紀後半に描かれた「江戸山王祭絵巻」には全身像の張り子の馬に乗る朝鮮通信使が 5 人描かれており、“一人”とあることからするとこの馬も全身像でしょうか。ほかには様々な道具を持った若者 50 人のパレードです。

【現代語訳】

十二番 大町 三丁目 四丁目

大町三丁目、四丁目の出し物の内、山鉾に先行する出し物の次第^{※1} 北村権七郎

一. 張り子の馬に乗る若者が一人、様々な道具を持った徒歩の若者が五十人。浅賀孫左衛門

※1.構成、順序

【読み下し】

十二番 大町 三丁目 四丁目

右の内先（行ッ）の次第 北村権七郎

一、はり馬乗り、せかれ一人。歩かちの者五拾人、何いづれもせがれ 倅、道具持共に。 浅賀孫左衛門

【現代語訳】

1 2 - 2. 象

象は普賢菩薩の乗物として古くから知られ、日光東照宮の彫刻にも象が登場しており、吉祥の象徴としての想像上の動物として知られていましたが、仙台祭の出し物として登場していたとは驚きです。

【現代語訳】

一、象の作り物を花車に曳かせ。役者十五人で、その内、唐子が七人。河村長松

【読み下し】

一、象の作物、花車ひかせ。役者拾五人、内唐子七人 河村長松

1 2 - 3. 若武者

赤母衣に金烏帽子、かなり目立つ“伊達者”の出で立ちですね。

【現代語訳】

一、若武者一人、赤母衣に金烏帽子かちの徒士が六人。 南町善左衛門

【読み下し】

一、倅武者壹人、赤母衣、金かちゑほし。歩かちの者六人 南町善左衛門

1 2 - 4. 塩屋

塩屋（塩田）での塩の製造工程を飾り物で表現しているユニークな飾り物です。塩屋という苗字ですから、自分の商店のPR かもしれません。

【現代語訳】

一、塩屋の作り物を車に仕懸け、中には塩屋うばの主が一人。汐汲みが二人、塩を担う姥が一人、塩を集める熊手持ちが一人、役者が八人。 塩屋新前九郎

【読み下し】

一、塩屋、作り物。車に仕懸け。中にしほや主壹人。しほ汲み貳人、塩にないは壹人、塩熊手持ち壹人、役者八人 塩屋新九郎

1 2 - 5. 侍

【現代語訳】

一、侍姿で様々な道具を持った徒士かちが二十人。 能内吉右衛門

【読み下し】

一、侍を仕立て、色々道具もたせ。歩かちの者貳拾人 能内吉右衛門

12-6. ちょうかいろう

“ちょうかいろう”が何を指すのか不明ですが、料亭や旅館風の名称なので、ひょっとすると自分の店のミニチュアを作り物にし、店のPRとしたのかもしれませんが。

【現代語訳】

一. ちょうかいろうの作り物を車に仕懸ける。役者が二十三人で、その内、唐子が三人。 高弥七

【読み下し】

一. ちやうくわいらう、作り物、車に仕懸け。役者廿三人、内唐子三人 高弥七

12-7. まりの懸り

蹴鞠の様子は「洛中洛外図」舟木本にも描かれており、八坂神社西楼門を入った左手に角材と竹矢来で囲まれた立方体のコートがあり、蹴鞠に興ずる4人の人物がいます。江戸時代初期には蹴鞠が庶民にとってもある程度、身近なスポーツとなっていたのでしょう。山鉾の飾り物としては類例がなく、大変ユニークな出し物です。明記されてはいませんが、“まりの懸り”は角材と竹で組んだコートを意味し、若者装束の4人は実際に中で蹴鞠をしてみせたのではないのでしょうか。スポーツ用品店のデモンストレーションのようなものかも知れません。

【現代語訳】

一. “まりの懸り”^{※1}の作り物を車にしかけ、若者装束で四人が車に乗る。役者二十七人はいずれも若者。乙女作右衛門

※1.蹴鞠をする庭の四方に植えた樹木のこと

【読み下し】

一. まりの懸りの作り物、車にしかけ。俵の装束にて、四人車に乗り、役者二十七人、何も俵乙女作右衛門

12-8. ^{なまず}鯰を瓢箪で抑える

室町幕府四代将軍・足利義持が考えた「丸くすべすべした瓢箪で、ぬるぬるした鮎を抑え捕ることができるか」という公案（^{じよせつ}禅問答）が題材。如拙が描いた「^{ひょうねんず}瓢鮎図」（国宝）が有名ですが、これを作り物にした発想や学識とともに、その作り物の意味が理解できたであろう、庶民の知的水準の高さに驚かされます。なお、大垣祭りには1648年に造られた金色の瓢箪を持った老人が踊り狂う大鯰を瓢箪で取り押さえようとする、^{なまずやま}からくり仕掛けの鯰山車が現存しています。

【現代語訳】

一. 坊主がなまずをひょうたんで抑える作り物を車にしかける。役者が十三人で、その内、稚児三人が車に乗る。 鶴見九左衛門

【読み下し】

一. なまつをふくへにて。坊主おさへ候作り物。車にしかけ。役者拾三人、内ちこ三人、車に乗り。 鶴見九左衛門

12-9. 蜘蛛舞^{くも}

蜘蛛舞は細い綱を渡る姿をクモに見立てた綱渡りの軽業のことで、室町時代から江戸時代初期に流行したといわれます。秋田県男鹿市の「くも舞」、茨城県竜ヶ崎市の「撞舞」、千葉県野田市の「つく舞」等が現在でも行われています。また、「津島祭礼図屏風」（大英博物館蔵）や「四条河原図屏風」（ボストン美術館蔵）にも腹這いで空中に架けられた綱を渡る「蜘蛛舞」の様子が描かれています。仙台祭も同様に綱渡りを2体のからくり人形が演じていたと考えられ、仙台祭にからくり人形があったことが分かる貴重な資料です。

【現代語訳】

一、蜘蛛舞の作り物に二体の人形のからくりを車に仕かける。舞台上で五、六人の若者にはやさせる^{※1}。

役者は十人。 多奈七右衛門

※1.手を打ったり、声を出したりして歌舞の調子をとる

【読み下し】

一、蜘蛛舞、作り物、人形式人、からくり車に仕かけ。舞台上二て五六之倅共にはやさせ。役者拾人。

多奈七右衛門

12-10. 酒呑童子^{しゅてん}

酒呑童子は大江山に住む鬼といわれ、源頼光が退治したことで知られています。仙台祭大絵図に「四天王大江山入の躰」（大町五丁目 松浦屋伊右衛門、年代不詳）があります。また、八戸三社大祭、盛岡山車、新庄まつり、唐津くんち等に現在でも山車飾りが登場します。変わらない人気を誇るテーマの一つとしてよいでしょう。

【現代語訳】

一、酒呑童子の作り物、甲冑武者が六人、役者が十六人。 清野名三衛

【読み下し】

一、しゅてん童子、作り物、武具着六人、役者拾六人 清野名三衛

12-11. らこし

【現代語訳】

一、“らこし”の作り物に鞍を掛け、いろいろつけ合せて歩ませる。六人の役者はいずれも若者。

【読み下し】

一、らこしの作り物にくらをかけ、いろいろつけ合せ、あゆませ。役者六人、何れも倅。

十二番 大町三、四丁目「巴御前^{ともえごぜん}」

巴御前は平氏を破って上洛を果たした木曾義仲の愛人として知られ、一騎当千の強者と「平家物語」に記された女武者です。後に源頼朝の有力御家人の一人、和田義盛の妻となり朝日奈義秀を生んだとされます。ただし、正史である「吾妻鏡」には登場しないことから、どこまでが史実か、実在の人物かどうかは判然としません。騎馬武者姿で長刀を持ち戦う姿が新庄まつりや盛岡山車、八戸三社大祭などの山車装飾

にあります。能、謡曲の演目として室町時代に成立した「巴」があり、人形浄瑠璃「ひらがな盛衰記」の初演は元文4年（1739）なので、仙台祭は極めて早い時期の作例と考えられます。第2回の他には寛文5年（1665）第6回に「ともへ」の記録が残ります。また、仙台祭大絵図に2種類の「和田義盛 巴御前勇戦之体」（表紙画像）があり、いずれも荒町の鈴木屋（伊右衛門）から出されています。他に母衣懸けが25人で、その内“大母衣衆”が2人と特記されており、洛中洛外図府木本に描かれたような巨大な母衣を背負っていた可能性もあるのではないのでしょうか。

この時の仙台祭で山鉾を出した町の単位としては12ですが、既述のとおり、南町は2つ、大町は個人参加と町単位での参加を併せて12の作り物などを出しており、仙台祭全体では実に24種類もの意匠を凝らした山鉾などの出し物が、曳き手や踊り手など様々な役割を持った人々とともに、華やかに城下町を練り歩いたこととなります。

記録には山鉾巡行に直接参加した人員だけで2,520人、仙岳院の御供が293人、総合計2,810人と人数が明記されており大変貴重ですが、この数値には神輿渡御の人員（※仙岳院の御供が293人と多いので神輿渡御を含めている可能性があります。）や先陣・後陣の足軽衆、大町の個人参加分の曳き手や警固、床几持ちの人数等、カウントされていない部分も相当数あると考えられますので、実数は3千人近いかもしれません。当時の城下町仙台の人口は5~6万人と推定されていますので、3千人規模のパレードは人々の度肝を抜く空前のスケールということができるでしょう。

更に本文には項目を別に立て「^{ぶがしら}武頭」についての記述が続きます。武頭は祭の先陣と後陣を袴姿の騎馬武者が務めたもので、祭毎に担当の足軽組が決められており、担当となった二人の組頭が抽選で先陣と後陣を決め、先陣を務めることが武士の誉れとされていたものですが、祭りの草創期から武頭の制度があったことがわかり、こちらも貴重な記録となっています。

なお、神輿渡御についての記述がありませんが、神輿渡御の行列は全国的に様式が統一されており、仙台祭としての目立った特徴がないことから省略したものかと考えられ、祭りの中心はあくまで東照宮の神輿渡御であったことはいうまでもありません。

【現代語訳】

一、巴御前の作り物を車に仕掛ける。

縄引きは三十八人で衣装は黒木綿や蒲色^{※1}木綿、奴子頭巾に黒脚絆。

役者が五人。徒士が七十八人、衣装は下に白小袖、上に黒小袖。羽織の裏地はうこん^{※2}で、半襟は赤、編み笠を被る。

床几持ちが六十人、黒脚絆で奴子の出で立ち。

母衣懸けが二十五人でその内、大母衣衆が二人、床几持ちが二十五人。小旗持ちが一人、警固の三十五人は袴を着る。合わせて四百二十九人。

※1.赤味の強い黄茶色

※2.赤みの鮮やかな黄色

右人数、合わせて二千五百二十人

右の外、二百九十三人が仙岳院^{※1}の御供で、但し人は氏子町から出る。

総合計は二千八百十人。

※1654年創建、東照宮別当寺

一、跡先^{あとさき}※1を物頭の内、大身の者^{おほみ}※2が七本道具^{しちほんどうぐ}※3を伴って馬に乗り、2人揃いの装束^{のりおり}で乗下。

右の作り物の内、役者共は勿論、猩猩^{しょうじょうひ}緋^ひ※4等、色々の装束である。

※1.先陣、後陣

※2.武頭のこと

※3.お供の毛槍や鉄箱のこと

※4.黄みがかった朱色

【読み下し】

一 ともへの作り物。車に仕懸け。

縄引き三拾八人、衣装、黒木綿、かは色もめん、奴子頭巾^{やつこ}、黒きやはん。

役者五人^{かち}。歩の者七十八人、衣装、下に白小袖、上に黒小袖、はをり、うこん赤裏はをり半氈り、あみ笠。せうき持ち六拾人。

黒きやはん、奴子出立ちにて^{いで}。ほろかけ式拾五人、内、大母衣衆二人。

せうき持ち式拾五人。小はた持ち壹人、けいこ三拾五人、上下にて。

合わせて四百式拾九人。 右人数、合わせて式千五百式拾人

右之外 式百九拾三人 仙覚院の御供 但し氏子町より出る

惣じて合わせて式千八百拾人

一 跡先^{あとさき}を物頭^{ものがしら}の内、大身なる者、七本道具にて式人对の装束にて乗り下り。

右の作り物の内、役者共は勿論、せうせうひなと色々の装束なり。

(補記)

1. 『仙台雑記』全体の表紙

松雲公採集遺編類纂 卷百八十五

森田平治^{しゅうざん}輯纂^{※1}

雑部 四

長州雑記

仙臺雑記

※1.資料を集めて書物を作ること

2. 『仙台雑記』全体の奥書

【現代語訳】

この一冊は、ある浪人が仙台藩の家来衆に縁^{けらい}※^{よすが}1があつて、寛文七年（1667）に仙台を訪問、数カ月滞在した。その時に聞いたことや人が話したことを記録し、所持していた。私は懇望してその記録を写し、これを書いた。

※1.縁、頼りになる手段や方法

【読み下し】

此の一冊は、或る浪人、仙台の家来衆に因^{よすが}有りて、寛文七年未^{ひつじ}年中、見廻（舞）いとして彼の地^かに至り、数月滞留す。其の時、聞く事、又、申し候事を書き付け所持す。予、懇望するを以て之を書く。

おわりに

仙台祭の記録は藩政期を通じて極めて少なく、断片的な情報しか伝わっていません。1657年、まだ始まってまもない第2回仙台祭の詳細な情報が、遠国加賀藩によって記録され、今日に伝わったことは奇跡といってもよいでしょう。

紙上ではありますが、360年余の時を経て仙台祭の壮麗なパレードが蘇りました。一人でも多くの方に、仙台でこのような素晴らしい祭が行われていたことに、思いをはせていただければ幸いです。

なお、金沢市立玉川図書館様の許可をいただき、資料編として原本・影印を公開いたしますので、併せてご利用ください。

【主な参考資料】

『仙臺祭の研究』（仙臺郷土研究会編）昭和11年6月

『仙台地名考』（菊池勝之助）昭和46年1月

『大江戸の天下祭り』（作美陽一）平成8年9月

『仙台祭についての覚え書き』（小井川和夫）「東北歴史博物館研究紀要」2 平成13年3月

『江戸山王祭礼絵巻』（福原敏男）平成30年3月

『仙台祭絵の研究』（浅野秀剛）「仙台市博物館調査研究報告 第40号」令和2年3月

1657年の仙台祭

発行日 令和6年1月

発行 仙台・青葉まつり協賛会

980-0012

仙台市青葉区錦町一丁目3-9 仙台市役所錦町庁舎3階

TEL 022-223-8441

著者 仙台・青葉まつり協賛会事務局長 高橋三也

協力 仙台市博物館学芸室 明石治郎